

## 島根半島のシダ植物目録とノート(2)

著者	野津 良知
著者別表示	Nozu Y.
雑誌名	北陸の植物 = The Journal of Geobotany = The Hokuriku journal of botany
巻	7
号	2
ページ	53-55
発行年	1958-04-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00065656">http://hdl.handle.net/2297/00065656</a>



## 野津良知※ 島根半島のシダ植物目録とノート (2)

Y. Nozu : A List and Notes of Ferns of Shimane Peninsula, Shimane Prefecture (2)

(1) **ヒカゲノカズラ科のもの** 採集地域に於けるヒカゲノカズラ科のシダは4種ある。その内3種は島根半島及び隠岐の両方に産し、ヒカゲノカズラは隠岐にだけ産するが、島根半島にもあつていゝ種であり、更にこの科の他種例えばアスヒカズラ、スギラン、マンネンスギ等もこの両方で発見されてよい種である。

(2) **ホソバコケシノブ属** 採集地のコケシノブ科のものは伊藤先生の“日本のコケシノブ科”を参考にしたら大体採集出来た。ただホソバコケシノブは採集しなかつたが、田中氏の鳥取県の報告もあるので、島根県にも多分あるものと思う。主に高山帯、亜高山帯に産するホソバコケシノブがあるとすれば、面白い。また北方型のヒメハイホラゴケがぼつぼつ見出されるのは当然であろう。尚チチブホラゴケもあつていゝ筈である。

(3) **タニイヌワラビ** 本シダは葉が50~80cmで大きく、小羽片の先は上向きで基部は耳形でふくれていて無柄である。また鱗片は少数で淡紫色、子葉群は線形で中軸近くにつく等の特徴をもっている。今度初めて鷗淵寺で採集したものである。従来本州中南部、四国、九州の暖地に産した。裏日本では石見、鳥取で産することが判っていたから今度の発見も当然あるべきものがあつたという事になる。最近(昭和32年4月、北陸の植物、第6巻、第2号)倉田氏はこのシダとアリサンワラビの類似について論じている。この地域に産する *Athyrium* 属のものはすべて鳥取県下にあるが、鳥取県にあつてこの地域に未見のものはタカネサトメシダ、オオヒメワラビモドキ、トガリバメシダ、ミヤマメシダ、ヌリワラビ等である。これらのシダも今後の調査により、多分見つかるであろう。

(4) **テツホシダ** テツホシダは葉柄が裸出し、葉片が革質で単羽状複葉、浅裂、裂片が三角形等で容易に他と区別出来る。伊藤氏によればABC型に属するもので暖帯性シダと言える。従つて台湾、琉球、日本等に広く分布するが東大の標本では伊豆大瀬崎、四国室戸岬、和歌山友ガ島、和歌山県新宮町、阿波那賀郡椿村蒲生田岬等のものがあり、裏日本では余り採集記録されていない。里見氏(金沢大、理、植)は隠岐島東郷村女池で採集している。他の島根県下にも多分あると思う。

(5) **クリハラン** 鷗淵寺のクリハランには2型あるようである。1型は普通見られるクリハランで葉の基部が楔形である。他型は葉片が全体的にバカ広く、基部はむしろ膨れて、急に葉柄に移り、楔脚の形でないもので、ヒロハクリハランと言つてよいものである。このクリハランは本州中南部、四国、九州等の暖いところに産する。東大には裏日本に産するこのシダの標本はないが、石見、鳥取等でも見出されているので、この地方ではやや普通のものようである。

※ 東京大学理学部植物学教室

(6) **ツクシャブソテツ** このシダは中島一男氏(1937)によつて初めて発見されたものである。その後の採集により、東大には阿波国美馬郡古宮村八面山、清澄山等のものがあり、国立博物館にも肥後水俣のもの等2, 3の標本がある。今度このシダを出雲大社社叢で見出し得たのは全くの偶然と言わねばならない。裏日本には珍らしい暖地性のシダである。最近倉田氏はこの標本を見てオニヤブソテツかも知れないと言つた。また同氏は本誌の第3巻, 第2号でこのシダについて論じている。だが大村氏のこのシダの写真(本誌, 第6巻, 第2号)と自分のとつたシダと比べて見ると非常によく似ている。

(7) **アスカイノデ** アスカイノデはイノデに非常によく似ていて区別しがたいが、一般にアスカイノデはイノデよりも葉面がぢんぐりして巾広い。更に葉柄, 中肋の鱗片が毛状であり, 特に葉柄基部の鱗片は鋸齒縁である。このアスカイノデの分布はかなり広く, 伊豆諸島から東北地方の太平洋岸を北上して陸前まで産するが, 今度の採集で裏日本のたしかな報告とすることが出来た。採集したのは鱒淵寺, 枕木山, 大満寺山(隠岐)などで他のイノデと共に案外沢山見られた。このアスカイノデは隣りの鳥取県では未見のようである。

(8) **サジラン** 今度の採集地鱒淵寺にはサジランがある。このシダはイワヤナギシダより葉面が広く, 葉の基部が次第に葉柄のつけねまで尾を引くし, 子嚢群は葉の上部に密に重なる特徴がある。がしかし, このシダとイワヤナギシダとの間には中間型もいろいろ見られて判然としない。また生えている場所も同じようなところにあり, 鱒淵寺でも両種があつた。鳥取県にはイワヤナギシダがないことになつているのはサジランとの明瞭な区別点がないためかも知れない。元来このサジランはイワヤナギシダと共に本州中南部, 四国, 九州, 琉球等に産する暖地性シダの一つである。ついでだが鳥取県の佐治不動滝, 西郷, 三徳山, 久松山, 花倉山等にはヒメサジラン, ピロウドシダがあるが, これ等のシダは島根県にもあつてよい。

(9) **シシラン** このシシランは島根県では石見(森山氏によるもの)にあることになつている。がしかし, 出雲では未見だつたところ今度鱒淵寺の滝の絶壁の上で発見し得た。Copeland(1947)の分類法のシシラン科のものはタキミシダも記録があるので, 鳥取県と同様2種あることになるが, この上, ナカミシシラン, シマシシラン等も発見されるなら面白い。

以上(1)の目録(49属, 160種, 14変種)とこのノートからこの地区のシダフロラについて概括的にふれて見たい。この地区は伊藤氏によればC帯に属し, 琉球, 台湾と共に日本の中では暖帯性のシダがあることになつている。たしかにこの地区にはホシダ, タニイヌワラビ, テツホシダ, イヌシダ, ウラジロ, コシダ, マメヅタ, クリハラン, フモトシダ, ツクシャブソテツ, タチシノブ, ホラシノブ, オオバノイノモトソウ, オオバノハチジョウシダ, シシラン, コモチシダ, イワヘゴ, オオキジノオ等がある。こんな点から考えるとこの地区は大分暖いところのように見える。だから暖いという点から慾を言えば, イワヒトデ, コバノイシカグマ, アツイタ, アオガネシダ, トキハシダ, ヌカボシクリハラン, シノブ, ヒモカヅラ等も期待したいところである。だがこの反面この地区にはコタニワタリ, イヌガンソク, クサソテツ, イワオモダカ, オシダ, ヒメハイホラゴケ等の北方型の

シダも産する。このような両方の事実を考え合わせると、この地区は一概に暖いと言う程のこともなく、北方型と南方型のシダがこの辺のところでお互に混生する中間帯を示すものと解釈出来る。このことは最近の生駒、川本両氏による鳥取県のシダ植物のまとめと一致する。両氏の鳥取県のシダ目録とこの地区の結果とを比較すると、158:120で38種ばかり鳥取県が多いが、この差は島根県の未調査の地区でユウに埋まると思う。地理的に考えて、むしろ島根県の方が多くてよい筈である。皆さんの今後の活躍を期待している。

訂正 大変軽率で申し訳ありませんが、別刷をもらつて、(1)のシダ植物の目録で凡例の産地を示すOとSの考え違いをしたらしく、OとSが全く逆になつてしまつていたことに気がきました。O、Sのところはまあそのままでもよいとしても、OのところはSに、SのところはOである。こゝに謹んで訂正します。

### 文 献

生駒義博、川本満喜夫：鳥取県のシダ植物 (一)、(二) (1957) — 伊藤洋：日本羊齒類図鑑 (1942)、日本のコケシノブ科 (1949)、日本列島に於けるしだ類の分布 (1938) — 田中昭彦：鳥取羊齒植物目録、シダの会報 No. 10 — 森山美具：西部石見の植物目録 (1954) — 林実：植雑 XII, XIII (1937, 1938)

### Résumé

The ferns of 120 species, which belong to 49 genera are indigenous to Shimane Peninsula and Okinoshima Isle, Shimane Prefecture.

At present, *Dicranopteris dichotoma*, *D. glauca*, *Athyrium otophorum*, *Cyclosorus acuminatus*, *C. goggilodus* var. *glaber*, *Dryopteris cycadina* var. *melanolepis*, *Lemmaphyllum microphyllum*, *Microlepia marginata* and *Necloporus ensatus* etc. are the southern elements, while *Vandenboschia radicans* var. *nipponica*, *Dryopteris crassirhizoma*, *Matteuccia japonica*, *M. Struthiopteris*, *Phyllitis scolopendrium* and *Pyrrosia hastata* etc. are the northern elements. Therefore these elements are distributed in these regions. Only two species, *Cyclosorus goggilodus* var. *glaber* and *Phanerophlebia tukusicola* have northern limit of their distribution in the Japan Sea shore of Honshu.

○ 金沢市内に新しく入った帰化植物 (里見信生) N. Satomi: On the Newly Introduced Plants to the Kanazawa City.

昨秋、丸谷次吉氏が持参された標本中に見なれない植物が入つていたので、早速案内していただいてその自生状態を観察すると共に材料を多数採集した。(金沢市野町、昭和32年9月16日) それ等の内トゲオナモミ (北村, 1934) *Xanthium spinosum* L., ゴウシウアリタソウ (前川, 1941) *Chenopodium carinatum* R. Br. は久内先生の帰化植物 (1950) により明にする事が出来たが唇形科の一草は未だその名を明にする事が出来ない。尚、附近にはオランダハツカ及びカナダハツカがある。附記: ゴウシウアリタソウは新潟市にもあつて、筆者は池上義信氏が昭和26年7月17日採集された標本を見ている。